

小野古墳

－大分港坂ノ市地区統合補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2020

大分県立埋蔵文化財センター

小野古墳

－大分港坂ノ市地区統合補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

序 文

大分県立埋蔵文化財センターでは、平成30年に臨港道路細馬場線の建設工事に伴う埋蔵文化財の調査を実施しました。この報告書は、測量調査と発掘調査を実施した小野古墳の調査報告書です。発掘調査の結果、小野古墳は墳丘部分が三分の一程度削り取られていましたが、主体部から抜き取られた石棺の下部に残っていた礫床と呼ばれる遺構と、少し離れた部分から別の箱式石棺が検出されました。礫床からは勾玉・管玉が多く出土しました。また残存部からその構造の一端を知る手がかりを得ました。これらの遺構から出土した遺物や遺構知見は、旧海部地域における小古墳の階層性や内部構造を考える貴重な資料となりました。

今回の報告書が県民の皆様を始め、文化財の保存と活用、ひいては地域の歴史に対する関心を深めていただく一助となれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関に厚く御礼申し上げます。

令和2年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

- 1 本書は、大分市佐賀関町大字馬場字中原に所在した小野古墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分港坂ノ市地区統合補助事業（臨港道路細馬場線）の新設区間の建設着工に伴い、県土木建築部から委託を受け大分県教育委員会が実施した。
- 3 調査・整理作業は、平成29年度測量調査、平成30年度発掘調査、平成31年度（令和元年度）資料整理を実施した。
- 4 現地での諸業務（遺構実測、遺物実測、写真撮影、作業員管理）は、委託した別府大学文化財研究所と株式会社九州文化財総合研究所が行った。
- 5 出土遺物並びに図面・写真等は、大分県立埋蔵文化財センター（870-0152 大分市牧緑町1-61）において保管している。
- 6 本書で使用する方位は世界測地系による。
- 7 本書の執筆は、第三章第6節と第四章第2節を服部真和が担当したほかは総貫俊一が担当した。編集は総貫と服部で行った。

目 次

序文

例言

第Ⅰ章 序

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	1
第3節	地理的環境	2
第4節	歴史的環境	2

第Ⅱ章 調査の概要

第1節	遺跡の概要	4
第2節	調査の経過	4

第Ⅲ章 古墳時代の遺構と遺物

第1節	調査の方法と調査区の設定	7
第2節	墳丘と地層堆積	7
第3節	第1主体	12
第4節	第2主体	12
第5節	第2主体の石棺を構成する板石	16
第6節	墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物	17
第7節	その他の遺構遺物	20

第Ⅳ章 まとめ

第1節	遺構 - 古墳・第1主体、第2主体(石棺) -	28
第2節	出土遺物	28

挿図目次

第1図	小野古墳の位置と周辺の遺跡	3
第2図	小野古墳の調査区と県道路線図	5
第3図	調査前の小野古墳付近の地形図	6
第4図	調査区の墳丘測量地形図	8
第5図	調査区の墳丘地形図及び遺物分布図	9
第6図	調査区の墳丘他断面図(1)	10
第7図	調査区の墳丘他断面図(2)	11
第8図	第1主体部実測図	13
第9図	第2主体部実測図	14
第10図	第2主体部の石棺材実測図(1)	15
第11図	第2主体部の石棺材実測図(2)	16
第12図	墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物(1)	18
第13図	墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物(2)	19
第14図	一字一石経塔の地下遺構	20
第15図	一字一石経塔の地下遺構 外容器	20
第16図	一字一石経実測図(1)	21
第17図	一字一石経実測図(2)	22
第18図	一字一石経実測図(3)	23
第19図	蛸壺転用の蔵骨器の出土状態	24
第20図	蛸壺転用の蔵骨器	24
第21図	その他の遺物	25
第22図	周辺地域の石棺材	27

表目次

表1	石棺材一覧表	25
表2	勾玉・管玉一覧表	25
表3	土器一覧表	25 ~ 26
表4	一字一石経観察表	26
表5	石棺材一覧表	26

写真図版目次

写真1	小野古墳の空中写真(1)	写真図版1	写真18	底部穿孔壺	写真図版6
写真2	小野古墳の空中写真(2)	写真図版1	写真19	台付鉢	写真図版6
写真3	小野古墳の空中写真(3)	写真図版2	写真20	小型丸底鉢	写真図版6
写真4	小野古墳の空中写真(4)	写真図版2	写真21	小型丸底鉢	写真図版7
写真5	小野古墳の近接写真	写真図版3	写真22	二重口縁壺	写真図版7
写真6	小野古墳の第1主体部出土状況	写真図版3	写真23	二重口縁壺	写真図版7
写真7	小野古墳の第1主体部	写真図版4	写真24	第2主体部石棺材	写真図版7
写真8	小野古墳の第1主体部墓壁断面	写真図版4	写真25	第2主体部石棺材	写真図版7
写真9	勾玉の出土状態	写真図版5	写真26	第2主体部石棺材	写真図版7
写真10	管玉の出土状態	写真図版5	写真27	第2主体部石棺材	写真図版7
写真11	第1主体部 礫床の石英礫	写真図版5	写真28	第2主体部石棺材	写真図版8
写真12	第1主体部 裏込めの内縁泥片岩破砕礫	写真図版5	写真29	第2主体部石棺材	写真図版8
写真13	第2主体部 清掃後の掘削直前の状況	写真図版5	写真30	第2主体部石棺材	写真図版8
写真14	第2主体部 石棺の完掘状況	写真図版6	写真31	一字一石経塔跡	写真図版8
写真15	第1主体部出土の勾玉	写真図版6	写真32	一字一石経塔跡	写真図版8
写真16	第1主体部出土の管玉	写真図版6	写真33	一字一石経	写真図版8
写真17	第1主体部出土の管玉	写真図版6	写真34	蛸壺転用の蔵骨器	写真図版8

第1章 序

第1節 調査に至る経緯

馬場古墳など古墳時代の古墳が密集することで知られていた大分市佐賀関町馬場の低丘陵地帯を、通称40m道路と大分市佐賀関町方面に延びる国道197号線を結ぶ道路の新設が以前から計画されていた。平成28年になって、臨港道路細馬場線として着工が具体化し、その計画路線は、小野古墳を含む尾根を東西に縦断することが判明した。そのため、平成29年になって臨港道路細馬場線のルートに沿って分布調査を実施するとともに、平成30年2月5日～同年3月26日にかけて路線内にある小野古墳と、隣接する庚申塚古墳の地形測量調査を実施した。地形測量調査の結果では、小野古墳と庚申塚古墳は直径15mの円墳と推定された。また隣接する庚申塚古墳は、等高線が表す地勢が前方部状であり、工事予定地内に一部含むことが明らかとなった。この庚申塚古墳は、従来から「前方後円墳」ではないかという意見の一方で、「前方部」については現代の掘り下げによる形成の可能性もあった。これらの点に留意して調査を進めた。

第2節 調査組織

【平成29年度 測量調査】

調査期間	平成30年2月5日（月）～同年3月26日（月）
調査主体	大分県立埋蔵文化財センター
調査総括	江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター 所長）
調査員	横澤 慈・服部真和
測量業務	（委託）別府大学文化財研究所 玉川剛司（業務主担当） 中原彰久（別府大学大学院博士前期課程2年）、塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平 （※ 博士前期課程1年）、吉岡拓哉（別府大学文学部史学文化財学科4年）、 佐伯孝央・清水航平（※ 3年）、赤池麗樹（※ 2年）

【平成30年度 本調査】

調査期間	平成30年5月29日（火）～同年7月25日（水）
調査主体	大分県立埋蔵文化財センター
調査総括	江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター 所長）
調査員	吉田 寛・綿貫俊一（調査担当）・服部真和
発掘業務	（委託）株式会社九州文化財総合研究所 井上策裕（業務技師）、加島英大（補助）
調査指導	田中裕介（別府大学教授）

【平成31年度（令和元年度）資料整理】

整理期間	令和元年（2019）5月21日（火）～令和元年（2019）8月31日（土）
整理主体	大分県立埋蔵文化財センター
整理総括	江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター 所長）
調査員	服部真和・綿貫俊一
整理業務	（委託）株式会社九州文化財総合研究所 永井美香（業務主担当）、野田千輝

第3節 地理的環境

大分市は、大分県の東部にあって、その北辺部が別府湾や豊予海峡に接する（図1）。北西部を標高628mの高崎山とその南側を120m～350m前後の丘陵地帯が展開する。また南部を標高800m近い霊山山系、東部を標高500m前後の根ノ木山系が市域を縁取る。西部から南西部方向にかけて大分川・七瀬川が流れ下り、また北上して海へ注ぐ。南からは大野川が北流し、海に注ぐ。これらの川は、大分市に入って、川幅と沖積平野を広げており、現在、大分平野と呼ぶ平野が形成されている。大分平野を形成する大野川下流域と大分川下流域の間には大分川層群・大野川層群が浸食されて形成された標高165m～127mの古城山・高尾山丘陵地帯が南北に延びている。一方、根ノ木山系の西側は、山系の主脈から北方へ延びる尾根と低い台地、低地が展開し、中を丹生川などの小河川が北流する。これらの小河川は、全て根ノ木山系西斜面に源流域がある。北方へ延びる尾根の中には海岸近くまで達した場所があり、大規模な例に大分市佐賀岡町細東部と同市佐賀岡町馬場の集落間に位置する低丘陵がある。この低丘陵に小野古墳を始めとした古墳群が立地する。

第4節 歴史的環境

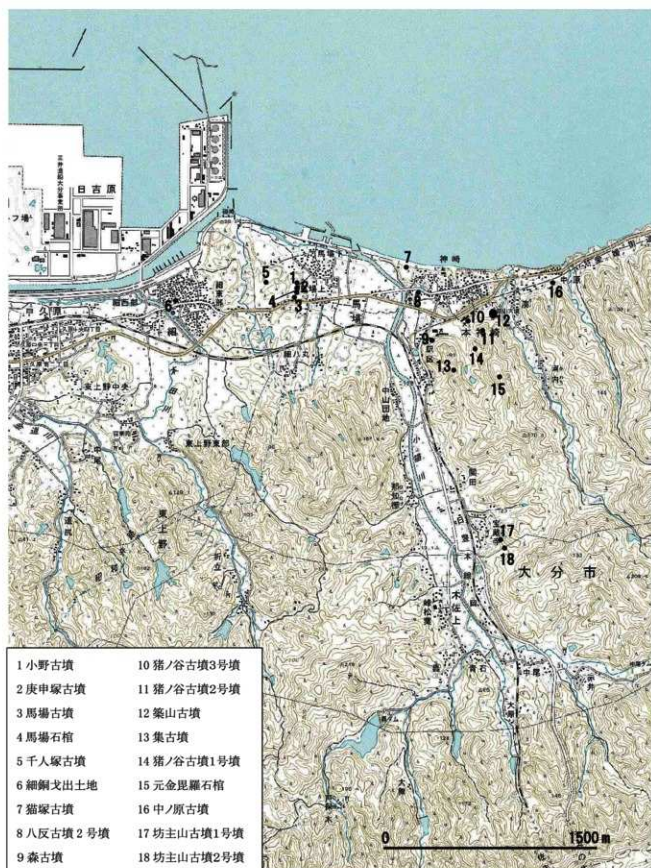
大分市の北東部は、起伏に富んだリアス式海岸北端部でもあり、その沖合は古事記・日本書紀に記された神武天皇東征譚にも登場するなど、古くからの海上交通路であった。この海上交通路とともに良好な漁場が広がっていたと思われる。まさしく『豊後国風土記』に記された「海部」の地域であった。この地域の遺跡分布については、大野川以東、大分市久原付近にかけて特に多い。一つには、開発が特に多いこともあるであろう。

大分市丹生から大分市佐賀岡町にかけて初めて人間活動の痕跡がはっきりするのが3万年前から16,000年前の旧石器時代で、丹生台地を中心として多くの遺跡と遺物が見つかっている。また人類との関係は不明であるが、佐賀岡付近の海底からは漁網に掛かってナウマンゾウの骨格の一部が引き上げられている。縄文時代の遺跡としては、後期末から晩期初頭頃の深鉢・浅鉢がまとまって出土した丹生川流域の毛見所遺跡がある。毛見所遺跡では、縄文時代から弥生時代に移り変わり始めた3,000年前頃の無刻目突帯文壺や一条刻目突帯文が出土しているが、同様な壺は大在の長無田遺跡でも見つかっている。長無田遺跡では、突帯文土器と呼ばれる壺や大型の石鍾、更に香川県金山産と推定されるサスカイトという石材を用いた石器類が大量に見つかっている。大量に出土した石鍾は、漁労に関わるものであろうし、金山産と推定されるサスカイトは海上交通路を利用して入手したことが明らかであり、この地域の特徴をよく表した遺跡である。

弥生時代の遺跡としては、浜遺跡で細形銅剣が1960年（昭和35）に出土しているほか、弥生時代中期中頃から弥生時代後期の祭祀に伴う土器や配石・小礫集中部が出土している。丹生川流域の西王寺遺跡では、古墳時代後期の五棟からなるカマド付き住居地に混入した弥生時代中期の壺破片がある。丹生川遺跡では弥生前期から中期頃の土器や矢板などが出土しており、水田経営を行っていたことがわかる。

古墳時代の遺跡としては、集落跡や古墳などの墳墓がある。志村と細の間にある海岸部の古砂丘地帯と、丹生川が交差する城原の台地周辺は、全長120mの亀塚古墳をはじめとして5基の前方後円墳が集中しており、首長権のあった海部の中枢地域と推定される。また別の中枢地域と考えられるのが、今回調査を行った小野古墳を含む細、馬場、神崎の周辺で、前期の猫塚古墳、全長90mの築山古墳、上ノ坊古墳、馬場古墳などの前方後円墳がある。今回調査を行った付近では、馬場古墳からみて北方に向かう尾根続きに馬場石棺、庚申塚古墳（円墳）、その北側に小野古墳（方形墳）と連続して分布する。また庚申塚古墳の西側の谷を隔てて存在する尾根に荒金古墳（円墳）、さらにその西側の尾根上に千人塚古墳（円墳）が位置する。馬場古墳以外は、いずれも直径10m前後の小円墳である。小野古墳の北側に小野家一統の墓地があり、ここにも石棺群がある。

古墳時代の後、城原地域に中安遺跡、城原・里遺跡で7世紀飛鳥時代の大形掘立柱建物跡が複数見つかり、海部評衡の跡と考えられている。



第1図 小野古墳の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の概要

小野古墳は、1965年（昭和40）3月、大分県教育委員会の委嘱を受けた入江英親氏、岩尾松美氏による分布調査で発見されている（入江1968）。今回、調査原因となった道路計画に際して、2017年（平成29）10月18日（水）から2018年（平成30）3月23日（金）にかけて行った前準備・立木伐開・地形測量調査を通じての現地踏査では、一帯は広葉樹を中心に一部植林による針葉樹林が鬱蒼としていた。しかし地表面を観察すると、段状の地形・切岸状地形など、昭和時代前期頃のミカン園造成に伴う人の手が加わった痕跡が見て取れた。

小野古墳・庚申塚古墳が立地する尾根の高低を観察すると、庚申塚古墳が位置する南寄りの部分は高く、尾根の中ほどでやや低く、北側で再び高くなっているが、小野古墳は、中ほどの低い部分に位置する。小野古墳は、本調査前の測量で直径が約15mの規模と推定したが、幅狭い山道掘削のため南側の3分1程度切岸状に掘削されていた。この切岸状部分を精査したところ、ほとんどが自然堆積層であり、盛土と思われる層は残っていないかった。このことから墳丘のかなりの部分が地山削り出しによる墳丘構築と推定された。墳丘のほぼ中央部分を掘り下げたところ、第一主体として石棺が抜き取られた礫床から装身具類が若干出土した。ここから約1.5m南東には小型の箱式石棺が出土していた。周溝は、尾根が経く北側の墳丘裾部でみつかったが、墳丘の南側では掘削した山道の南で僅かにその痕跡のみみられた。このほか小野古墳の西側（谷側）の墳丘裾部で、一字一石経を埋納していた甕と、蛸壺を蔵骨器に転用した可能性のある墓を検出した。

小野古墳の南に前方後円墳と記録されたことのある庚申塚古墳が隣接する。その「前方形」の一部が調査区内にあることから掘り下げたところ、自然堆積であり、ミカン園造成に伴う掘削痕跡であった。

第2節 調査の経過

発掘調査予定地は、道路新設予定地のうち、尾根上の部分を調査区とした。本調査は、平成30年（2018）5月29日（火）から開始し、まず墳丘の内外にかけて幅0.50mの溝（層位確認トレンチ）を設定し、移植機で慎重に掘り下げた。その結果、北側裾部で周溝が見つかり、これを追いかけるように周溝の検出・掘り下げを開始した。墳丘中央部付近で石棺やその掘込は見られなかった。6月12日（火）から墳丘の掘り下げに並行して一字一石経の詰まった部分の掘り下げを開始した。その後、甕の中に廃棄された状態で瓦や基壇が出土した。6月18日（月）から庚申塚古墳の「前方形」にトレンチを入れるが、自然堆積層であった。6月22日（金）から、だめおして墳丘頂部より、やや北東部を掘り下げると第1主体の礫床部と勾玉が出土し始める。7月4日（水）、田中裕介氏（別府大学教授）が調査指導に来訪。主体部の掘込が盛土の上からなのか、下からなのかを確認する必要があるとの指導を受ける。7月21日（土）10:00～11:00に、現地説明会を実施し、約30人の見学者があった。7月25日（水）に本調査を終了する。

本調査は、平成30年5月29日（火）～同年7月25日（水）にかけて実働36日間行った。

平成30年5月29日（火） 午前中、空中写真撮影を実施し、午後トレンチ設定・掘削等の調査開始

平成30年5月31日（木） 小野古墳の北側周溝確認

平成30年6月18日（月） 庚申塚古墳の「前方形」にトレンチを入れるが、遺物・遺構（盛土）は皆無

平成30年6月21日（木） 石棺を掘り下げたが、遺物皆無

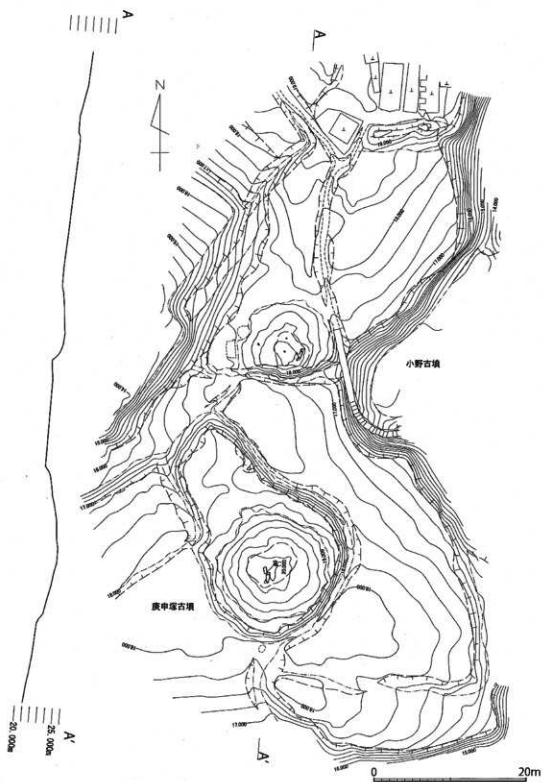
平成30年6月22日（金） 小野古墳墳頂部で石英の礫床を確認し、勾玉出土

平成30年7月25日（水） 遺構実測終了後、撤収・調査終了

入江英親1968 「佐賀県周辺のゼネラルサーベイ」『中ノ原、馬場古墳緊急発掘調査』大分県文化財調査報告 第15輯、51～52



第2図 小野古墳の調査区と県道路線図



第3図 調査前の小野古墳付近の地形図（別府大学文化財研究所に委託作成）

第三章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 調査の方法と調査区の設定

小野古墳は、近隣に馬場地区の集落があるなど生活圏に近く、調査前の段階で既に大きく改変を受けていた。第2主体とした箱式石棺の最上部が蓋のない状態で上部が露出していた。また既に掘削されていた墳丘の南側断面の観察から盛土がほとんど流出している様子が窺えた。

調査は、古墳の墳頂部及び尾根と同じ南北方向を主軸とする幅0.50mのトレンチを墳丘外まで延ばし、墳頂部で東西方向に直交する同じ幅のトレンチを墳丘外まで延ばすように設定した。この十字形のトレンチ設定により、墳丘を四区分する形で調査を行った。はじめに墳丘の堆積状況を把握する目的で、設定した十字形トレンチから掘り下げ始め、次に四分割した部分を掘り下げた。

道路の造成で消滅する古墳であるため、調査に際しては墳丘の規模と墳形、墳丘や主体部の構造に注意することに努めた。その結果、古墳構築後の掘削や盛土の流出により、大きな影響を受けていたが、二つの主体部や周溝が存在していたことと、勾玉や管玉などの副葬品が出土するなど、貴重な成果があった。

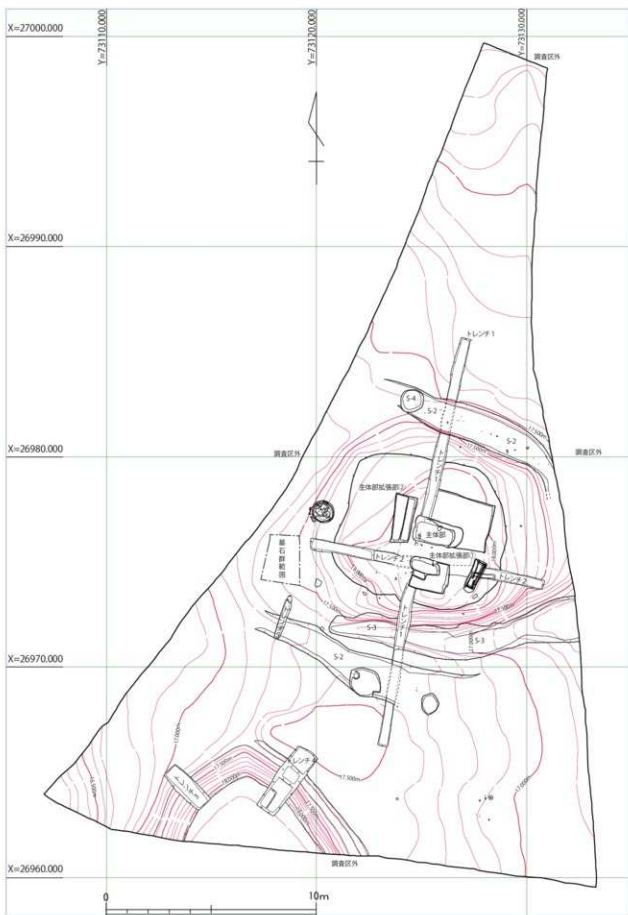
第2節 墳丘と地層堆積

北側の周溝については、その幅が1.7mで、調査区外との境界である東側東壁近くで幅0.8mと狭くなり、南方向へ屈折する状況が窺えた。この東西方向の周溝は直線的であることから墳丘の平面形が方形の方形墳である可能性が高く、深さが0.25mで、底部は平らな逆台形の箱状である。十字形のトレンチの交点部分から4.35mのところ周溝の底部付近の落ちと推定する部分がある。これを南側の東西方向の周溝の痕跡とすれば、南北方向が11.3mの長さで推定される。東西方向には、調査区内に周溝の痕跡はないが、北東壁際の周溝屈折部の肩部とS1とした一字一石經出土智付近を墳端の変化点とすると東西約10.7mの長さとなる。現状での墳丘の高さは、堆積図(第6図)における北側の周溝内側の変化点と墳頂部で最も高い部分から0.82mとなる。

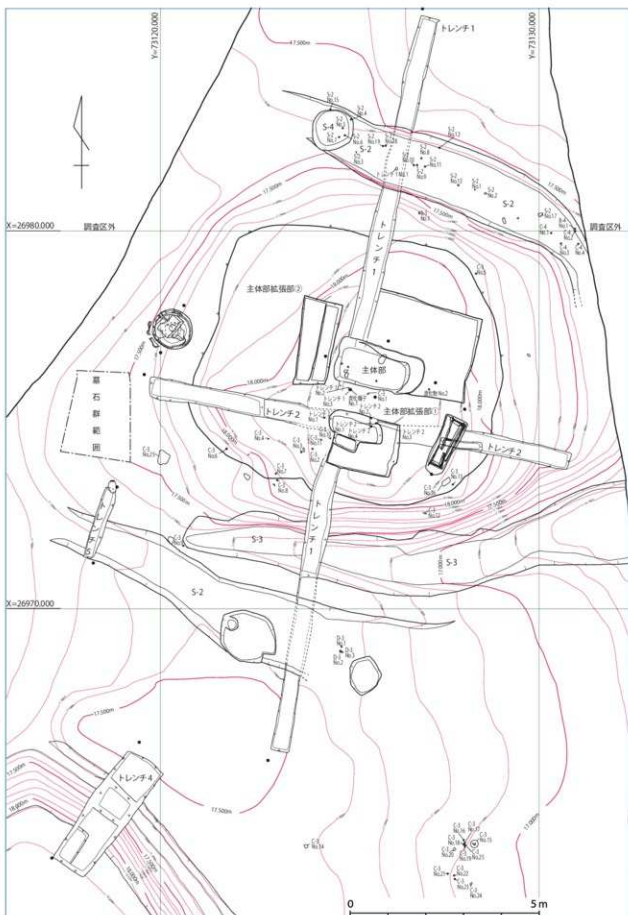
1a層 暗灰色土	表土層であるが、竹の根が著しい部分である。上部域が流出後、元々は地山層であった部分が表土化、耕作土化した部分である。
1b層 暗灰色土	竹の根がやや多い。墳丘南側客土であり、耕作土である。
1c層 暗灰色土	竹の根が多い。旧里道内の上位流入土。
1d層 暗灰色土	竹の根は少ない。旧里道内の上位流入土。
2a層 茶褐色土	柔らかく、やや粘りがある。アカホヤの風化・再堆積土である。
2b層 暗褐色土	柔らかく、やや粘性がある。アカホヤの風化・再堆積土である。
2c層 澄色土	硬く締まり、粘性はない。アカホヤの風化・純粋層である。
3a層 白灰色土	親指大の石英と、石英の砂粒が多い。水性堆積層。
3b層 澄色土	土壌と石英の砂礫が半分ずつの割合の層。水性堆積層。
3c層 黄灰色砂礫層	石英等の砂礫からなる。

周溝内堆積土

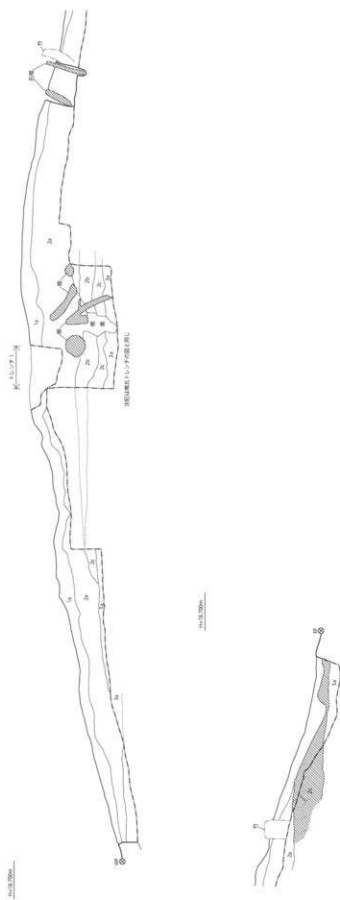
① 黒褐色土	周溝最上位の流入土。竹の根が多く、締まりがない。
② 暗褐色土	締まりがない。①に比べ、色が僅かに薄い。
③ 暗黄褐色	石英の砂礫を含む整地層。
④ 黒色土	南側の周溝の基底部付近の堆積物か。



第4図 調査区の境丘測量地形図



第5図 調査区の増丘地形図及び遺物分布図



第7図 調査区の墳丘他断面図(2)

第3節 第1主体

第1主体は、墳頂部の中でも最も高い部分よりやや北側に位置している。その主軸（長軸）は、N-87°-Eの方位である。主体部の規模は、長さ4.66m、幅2.40mで、深さは0.42mである。その平面形は、東端が半円形で西端が隅隅となる細長い短冊状を呈している。内部は、東端から0.75mの部分に段があり、これが本来の掘りかたであるかもしれない。段がある部分から西端までが3.95mで、幅も2.40mである。

内部には、概ね東半部を中心に礎床が残存していた。西半部では礎床が破壊・攪乱された際になくなったのであろう。墓坑壁に沿うように緑泥片岩の板石片が縦方向に刺さっている。こうした石棺材碎片は西端の北側隅部でもみられる。このことから板石片は、石棺が破壊・抜き取られた際の残滓と考えるのが妥当である。したがって抜き取られた石棺の残滓や礎床の分布を勘案すると、段や西壁のやや内側にその位置を想定できる。この想定からすると、長軸長さ3.5m、幅1.40mとなる。段の内側や墓坑壁内側から規模を推定すると、礎床内からは、4点の勾玉と6点の管玉が出土した。このことから少なくとも東半部側に頭部を向けた埋葬遺体であったことが窺える。西半部側は、上述したように破壊・攪乱された可能性もあるので埋葬遺体の頭部方向はわからない。墓坑の掘りかたは、1層の竹根が隙間のないほど蜜生した表土層とした部分を除去した2層上面で検出した。2層はアカホヤなどが再堆積した自然であることから、この層を掘りこんでいるにしろ、盛土の上かしたかは判断できなかった。

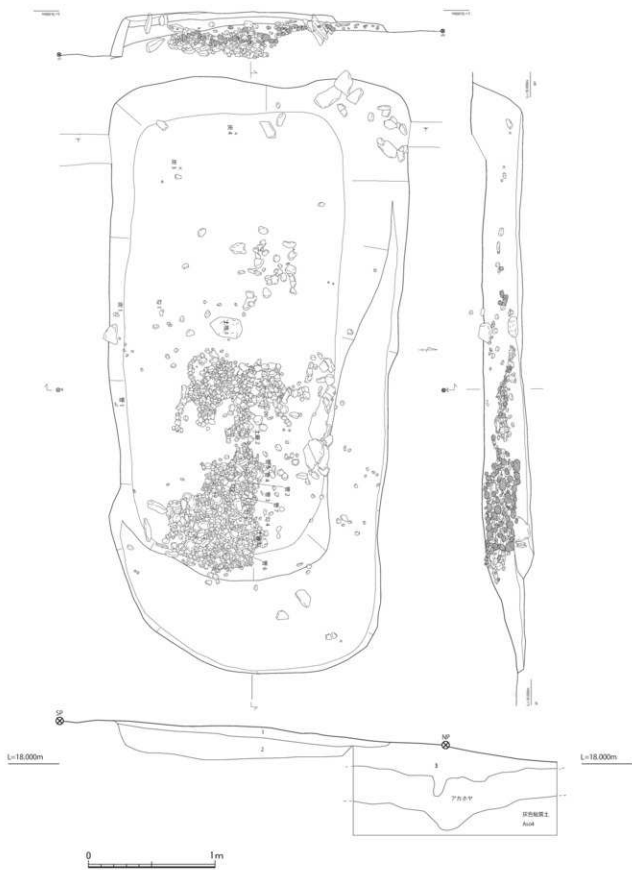
第4節 第2主体

第2主体は、墳頂部の中でも最も高い部分にある十字形のトレンチ交点から東方へ26m降った斜面上に位置する(第5図)。その主軸(長軸)は、N-26°-Eの方位であり、概ね南北方向にむける。主体部の規模は、墓坑が長さ1.61m、幅0.61mで、深さは0.45mである。その平面形は、南端が半円形で西端が隅隅となる細長の短冊状を呈している。墓坑の横断面形は、箱掘り状であるが、長軸の縦断面系は、南端の傾斜がゆるいものの、北端は垂直に近い角度となっている。その底面は、水平に調整したとみられ、平らである(第9図)。

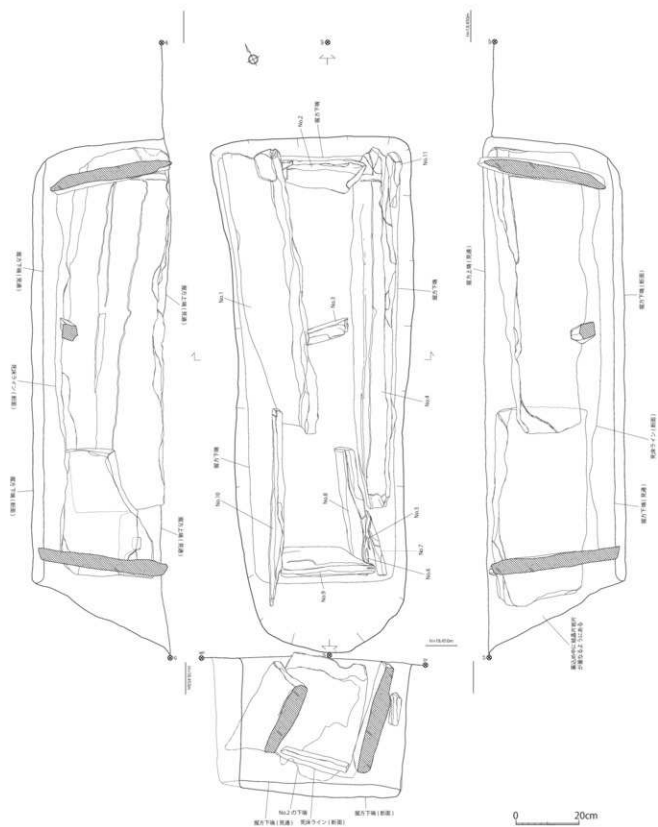
墓坑の内側には箱式石棺が構築されている。石棺の組み合わせかたは、基本的に長軸の東壁・西壁とも北側の巨大板石1枚と南側のやや小さい板石1枚からなり、短軸は北壁(小口)・南壁(小口)とも小型方形板石(小口の石)1枚からなる。墓坑下底面の整地後に行われた石棺構築での板石の重なり具合をみると、その重なり状況から石棺の構築過程がわかる。①まず東壁の巨大板石(No.4)を北寄りに設置する。次に巨大板石の南寄りの内側側面に小型板石(No.8)を重ねるようにたてる。②次に完成した東壁の北側端部と南側端部よりの内側面に小型方形板石(小口の石)の縁部を直交するように付ける(北No.2, 南No.9)。③あらかじめ設置していた南側の小型方形板石(小口の石No.9)にやや小さい板石の内側面を設置する(No.10)。次に巨大板石(No.1)の内側面を北側の小型方形板石(小口の石No.2)の縁部に設置させつつ、その南端近くの外側面をやや小さい板石(No.10)の内側面に重ねることで石棺の下部構造が完成する。この間、石棺材の安定を図るために適宜裏込め土を墓坑との間に充填したことは充分推測できる。

石棺の規模は、南北の小口間が1.31m、北側小口部分での幅が0.41m、南側小口部分での幅が0.36m、死床面までの深さは0.41mである。小口部分での石棺幅は、南側が狭く、北側が幅広いので、死者の頭部方向は北側と推定される。

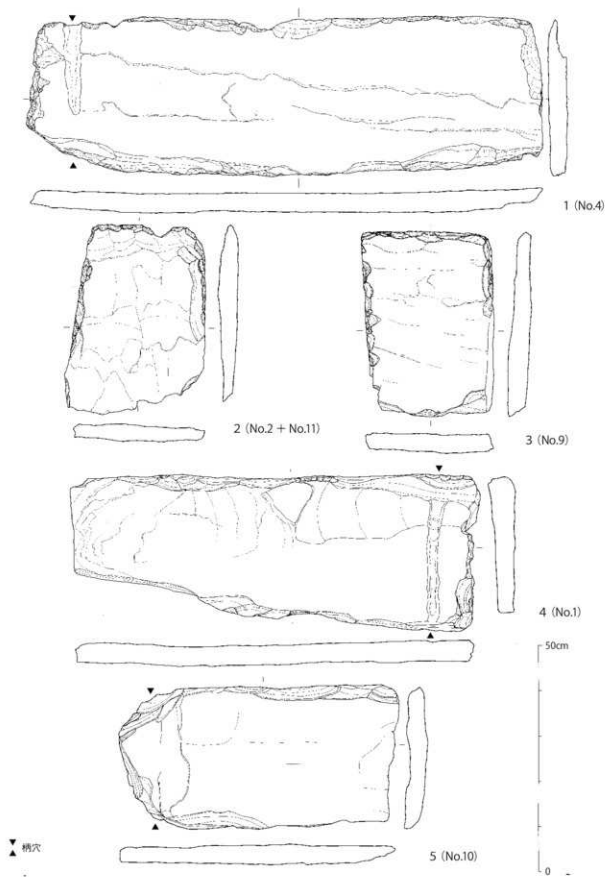
第2主体の石棺は、調査を開始する以前から既に露出し、石蓋もない状態で内部に流入土が深さの半分以上堆積していた。しかし石棺は1層の根が隙間のないほど蜜生した表土を突き破るような状況で出ているが、元々は、深い穴の中に設置されたことが推定される。そうすると墳丘を構成する盛土と自然層(地山)がかなり浸食・流出し、その後上面が竹根の垂直茎茂域となった部分を1層とした可能性が極めて高い。したがって第2主体の構築が盛土の上か下かを判断できなかった。しかし第2主体自体が、墳丘完成後に構築された追葬である可能性が高いことから、第2主体の構築は墳丘構築(盛土構築)後という蓋然性が高い。



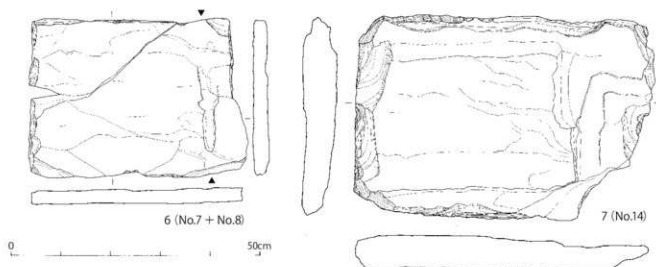
第8図 第1主体部実測図



第9図 第2主体部実測図



第10図 第2主体の石棺材実測図（1）



第11図 第2主体の石棺材実測図(2)

第5節 第2主体の石棺を構成する板石

ここでは、第2主体の石棺を構成する板石6点の内面側を図化したので、その特徴を記載する。

1は、東壁側の石棺材No.4で、長さ1.143m、高さ0.353m、厚さ0.049mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。重量は、31.2kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、周囲にハツリを加えたり、縁部を押し潰して成形している。左端から0.09m内側に縦方向で浅い柄溝があり、次に記載する北壁小口部分の板石の(2:No.2)右縁部をかませる溝である。短冊状を呈する。

2は、北壁側小口の石棺材No.2で、長さ0.308m、高さ0.419m、厚さ0.045mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。重量は、8.5kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、上縁部・左縁部・右縁部を中心に周囲にハツリを加えている。高さが短い長方形を呈する。

3は、南壁側小口の石棺材No.2で、長さ0.288m、高さ0.406m、厚さ0.039mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。重量は、9.0kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、周囲にハツリを加えるほか、折れ面を利用する。長方形を呈する。

4は、西壁側の石棺材No.1で、長さ0.903m、高さ0.350m、厚さ0.043mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。重量は、31.2kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、周囲にハツリを加えたり、折れ面を利用した成形である。右端から0.10m内側に縦方向で浅い柄溝があり、上記した北壁小口部分の板石の(2:No.2)左縁部をかませる溝である。短冊状を呈するが、左の下縁斜めに細くなる。

5は、西壁側の石棺材No.10で、長さ0.608m、高さ0.312m、厚さ0.040mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。重量は、15kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、周囲にハツリを加えたり、折れ面を利用した成形である。左端から0.09m内側に縦方向で浅い柄溝があり、上記した南壁小口部分の板石の(3:No.2)右縁部をかませる溝である。右端表面は表面に抜けるように節理で割り取られる。

6は、東壁側の石棺材No.7+No.8で、長さ0.440m、高さ0.318m、厚さ0.028mの規模で、石材を緑泥片岩とする。No.7は、内部下面に落ち込んでいた。重量は、8.5kg。板状の石材とするために、節理を利用して割り取った節理面が残る。形は、折れ面を利用して周囲にハツリを加える。左端から0.07m内側に縦方向で浅い柄溝があり、次に記載する北壁小口部分の板石の(3:No.9)左縁部をかませる溝である。方形である。

7は、北端側の蓋石と推定され、北側小口の脇にあった石棺材No.14で、長さ0.587m、高さ0.399m、厚さ0.067mの規模を有し、石材を緑泥片岩とする。図は内面側であり、石棺本体に嵌め込むためと思われる方形の段を内面側にハツリによって作り出している。重量は、23kg。

第6節 墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物

勾玉（第12図8～11）

石棺内から出土した勾玉は4点である。いずれもメノウ製で、石材は透明部分の多い淡い色調である。形状は丸みをもつC字形を呈するが、大きさは8がやや小ぶりであり長さ2.3cm・厚さ0.7cm、9～11は長さ2.8cm・厚さ0.8cmである。片面穿孔で、孔は逆円錐形を呈するが、9は終孔部の端面に割れ目鉤が生じている。10・11は穿孔の位置が端部に寄る。

管玉（第12図12～17）

石棺内から出土した管玉は6点である。石材の色調はいずれも淡緑色であり、石材分析は行っていないが碧玉製であろうか。直径はすべて0.35cmと均一であるが、完形の12・13・15を見ると、全長は12が2.0cm、13が1.8cm、15が1.2cmと量法は異なる。鉄針等と推測できる工具による両面穿孔で、孔径が0.15cmと管玉の直径に対して孔の大きさは比較的大きい。

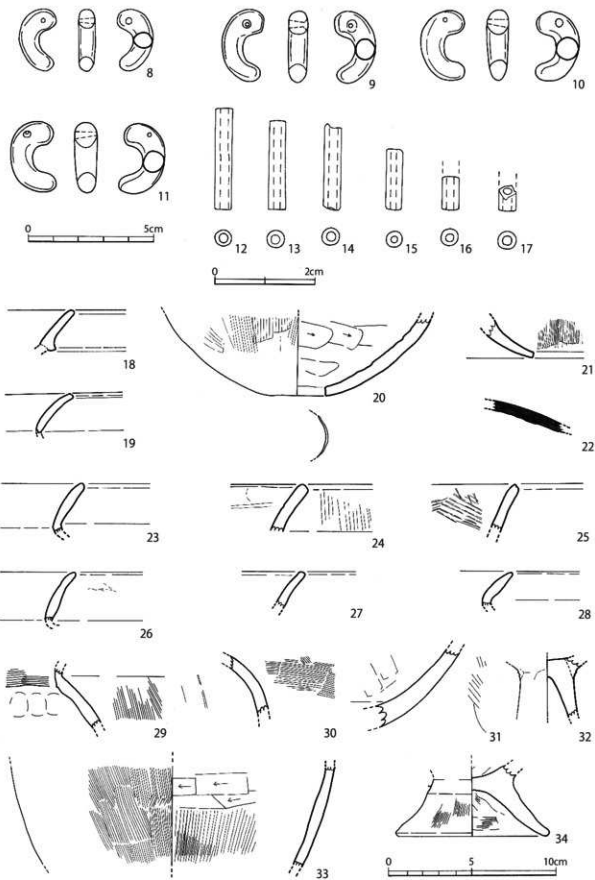
土器（第12図18～第13図53）

土器はほとんどが破片資料であり、器種の判断が困難なものが多い。同一個体と考えられる資料も重複して図化しているが、出土個体数は極めて少ないと考えられる。土器の胎土は角閃石・長石と0.5cm大の石英粒が混じるのが特徴である。石英粒が混和材として混じる特徴は、海部地域の土器に見られる特徴であり、土器が在地で製作されたことを示している。土器は出土場所により大きく①小野古墳の墳丘部（18～28）②周溝内（29～44）③小野古墳から南に離れた地点（45～53）に分けられる。

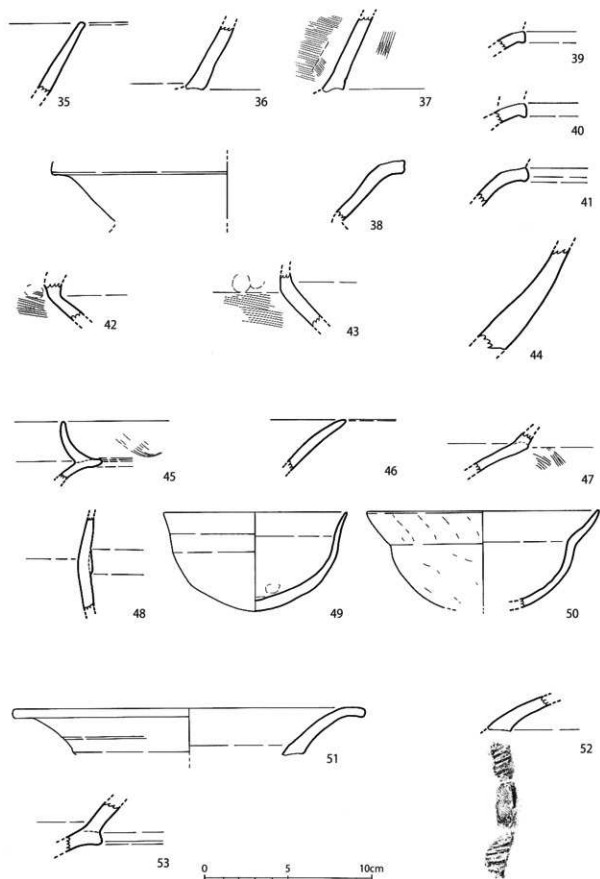
小野古墳の墳丘部では、表面で採集されたもの（18～22）と墳丘にかかるトレンチ内（23～27）・主体部（28）から出土したものがあがる。トレンチおよび主体部から出土した土器は、墳丘の削平や石棺の破壊された際に混じりこんだものと考えられる。18は二重口縁壺の二次口縁部である。20は底部焼成前穿孔が施された壺である。胴部は球形に近い形状と考えられる。19・21・22は器種を断定できないが、19は壺の口縁部、21は高杯の脚部、22は須恵器の壺ないし瓶の肩部片と考えられる。23～26は壺ないし鉢などの口縁部である。27・28は小壺などの口縁部である。

周溝内については、北側周溝S002（29～34）と、南側周溝（35～44）から出土したものがあがる。周溝内の土器は、溝の底から浮いた状態で破片がまとまりなく出土していることから、周溝の埋没過程で破片が自然に落ち込んだものと考えられる。29～31は壺と考えられる破片で、29は頸部～肩部、30は胴部、33は胴部下半部、31は底部付近であろう。32は高杯の脚部で、脚部に坏部が付加する布留系高杯である。34は脚付鉢であろう。35～44は二重口縁壺で、同一個体の可能性が高いと考えられる。35が二次口縁の端部で、直線的である。36・37は二次口縁で、下面は一次口縁部からの剥落のため平坦となる。38～41は一次口縁で、頸部から斜めに立ち上がると考えられる。42・43は頸部付近である。44は底部付近と考えられるもので、穿孔は確認できない。

小野古墳から南に離れた地点は後世の削平を受け、調査時点では東へと緩やかに傾斜する平坦面となっていた。土器（45～53）はこうした地形の表土ないし耕作土中から出土したものである。45～50についてはまとまって出土したものの、古墳時代の遺構に伴う出土状況ではないと判断している。45は安国寺系二重口縁壺である。二次口縁は強く屈曲して立ち上がり、表面は磨滅しているが撫摸波状文が一部に残る。46～48は器種不明である。46は口縁端部であるが、上下や傾きも不明である。47は屈曲部で接合が剥落した破片である。48は頸部と思われる屈曲部に低い突帯を貼付けている。49・50は小型丸底鉢である。49の胎土は石英粒が混じるのに対し、50は石英粒の混じりの目立たない比較的精製な胎土である。久住ⅡB～ⅡC期に該当すると考えられる。51～53は二重口縁壺で、同一個体と考えられる。51・52が二次口縁部で、端部付近で強く外反する。一次口縁と二次口縁の接合面には密着させるための刻みが施されているのが確認できる。



第12図 墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物（1）



第13図 墳丘・主体部・周辺出土の古墳時代遺物（2）

第7節 その他の遺構遺物

(1) 一字一石経塔 (第14図)

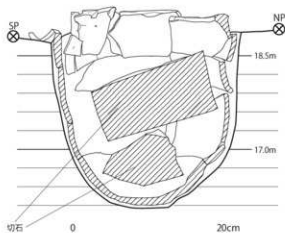
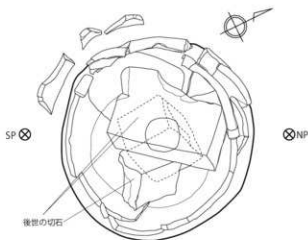
小野古墳の西側の墳丘裾部に一字一石経(塔)が位置していた。調査直前の状況は、直径2m弱の範囲に長さ5cm前後で扁平な小砂利が敷き詰められたように散乱していた(写真31)。その状況から、これらが一字一石経であり、内部が掘り返されて生じたことが窺えた。しかし、碑銘を記した外表遺構たる石塔は見られなかった。このあたりは近世・近代墓があったようで脇に墓標が小積まれていたが、ここにも一字一石経にかかるとは思われなかった。表面に散らばる一字一石経を片付け、掘り下げていくと直ぐに外容器である瓦質のハンド甕があり、その外側にわずかな間隙をおいて埋納坑の掘削ラインを確認した。このため、一字一石経の小砂利が充填された甕内を半割して掘り下げたところ、深さ0.20mのところまで破損した石塔の基壇破片が出土した。しかし、基壇の破片は現代の機械で切り取り成形により制作されたもので、一字一石経と甕の年代観とは全く異質なものであった。おそらく、20世紀になってから石塔が撤去され、一字一石経が詰まった内部を掘削し、その後、切石の基壇破片二個を投入し、手荒く埋め戻した様子が窺えた。埋納坑は、直径0.25m、深さ0.26mで、断面形はU字形である。

遺物は、一字一石経の小砂利と、それを納入していた黒灰色瓦質の甕である。甕は、高さ1.036m、口径

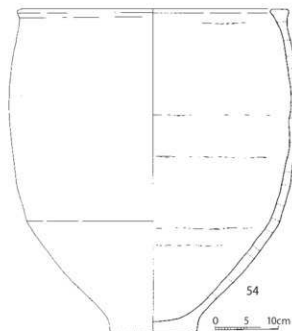
0.84m、胴径0.46m、底径0.272mの大きさである。特徴は、底部が浅鉢状に開き、胴張に立ち上がり、幅広の口縁となる。内面には積み上げた痕跡が縞状に残る。

(2) 一字一石経 (第16図～第18図)

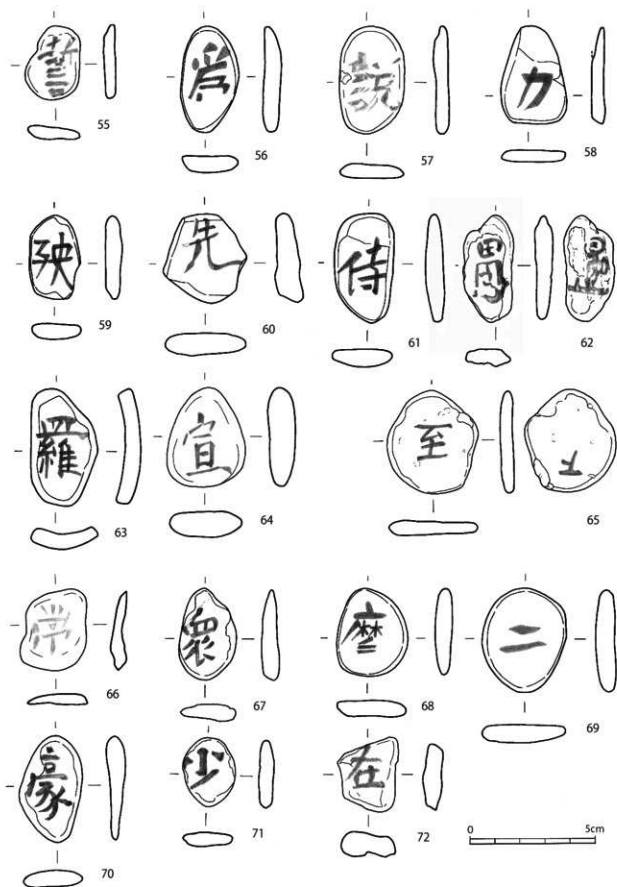
一字一石経は、可能な限り回収し、墨書のあるものとないものに分けた。そして図化の対象とした前者が、肉眼で墨書を確認したもの全てであった。一字一石経の総点数は数えていないが、その総重量(354.68kg)を、墨書した扁平な小砂利の平均重量で割って算出した。その結果、29,665点であった。墨書した文字は、図示した



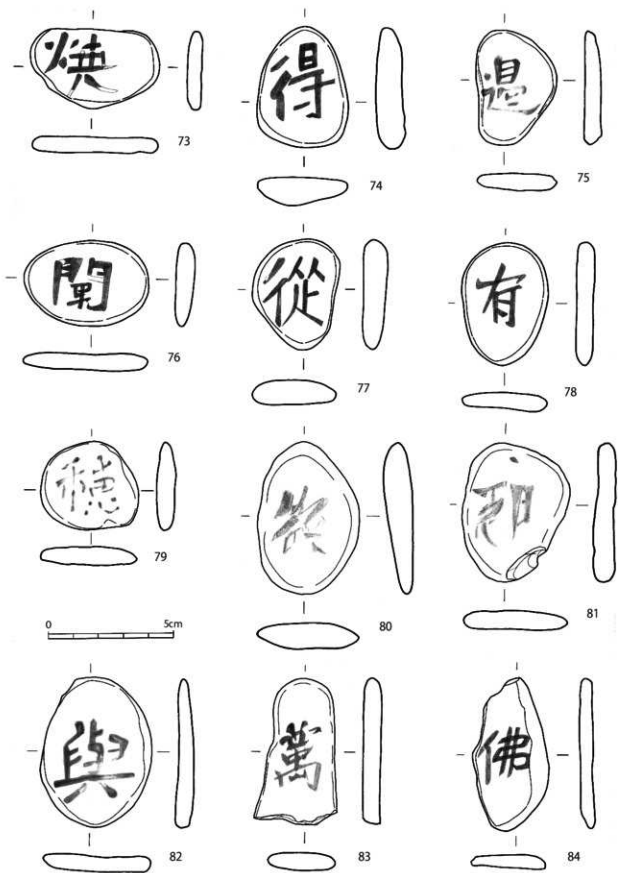
第14図 一字一石経塔の地下遺構



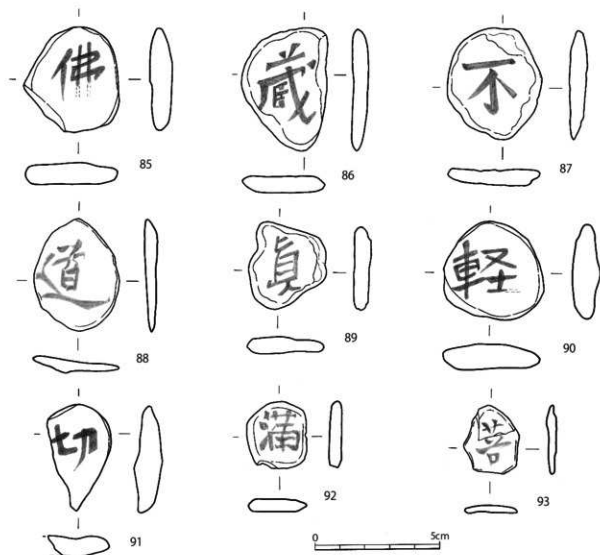
第15図 一字一石経塔の地下遺構 外容器



第16圖 一字一石經實測圖(1)



第17圖 一字一石經實測圖(2)



第18図 一字一石経実測図(3)

とおりであるが、どのような經典にもとづくものかは追及しきれてはいない。一字一石経塔が位置する場所は、近年まで小野家一統の墓地であったが、その墓碑に刻まれた文字には「…禪定門…」とあり、あるいは近域に所在した曹洞宗など禅宗系の寺に関わる經典の可能性がある。

(3) 小児墓カ (第19図)

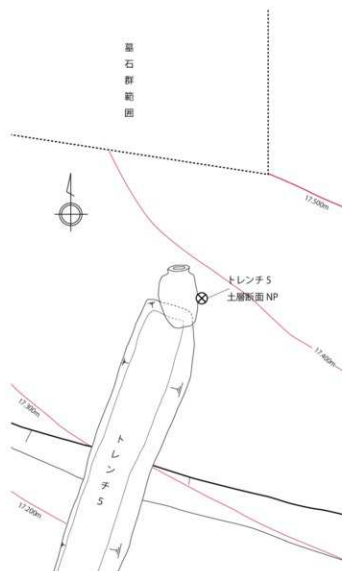
この遺構は、C2区で小野古墳の西南裾部付近に位置する。この付近は、近世・近代の墓石が立っていたところで、調査開始段階には傍らに墓石が積み上げられていた(写真5、右上)。そして掘り下げていく過程で、二次堆積土中から出土したのが蛸壺である。蛸壺は、口を北側に向けた状況で横倒しに埋められていた。出土位置から小児、もしくは小動物の遺体を入れた容器と推定している。二次堆積土を掘って埋めており、墓坑ラインは不明であった。

蛸壺の容器は(第20図94)、底部に孔を二つ穿ち、胴が樽状に張る。口縁端部が平坦で肥厚する。底部の二孔は、焼成前の穿孔で、蛸壺を連続して繋ぐ綱を通すための孔である。二孔間には、「ア」と墨書されている。内部には土が流入していたが、骨などは見受けられなかった。蛸壺の風化からすると、近代・現代の

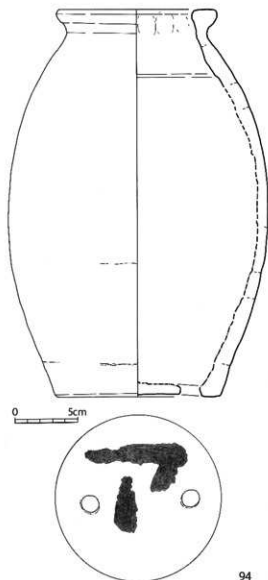
所産と推定される。

(4) 包含層から出土した遺物(第21図)

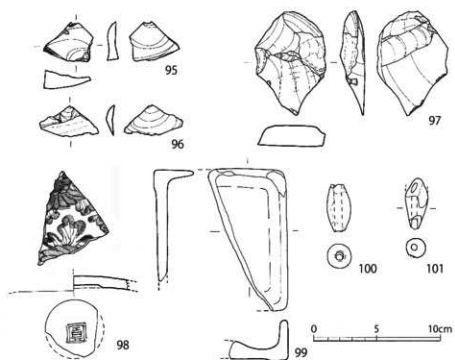
調査区内を清掃・掘り下げる過程で出土した資料を取り上げる。小野古墳の墳丘が大きく掘削された崖面が南側にあるが、この面を清掃中にアカホヤ層のあることが判明した。その際、出土したのが推定姫島産黒曜岩を石材とする剥片である(第21図95-97)。剥片に伴う土器はないが、出土層から縄文時代早期後半から前期にかけての時期であろう。このほか、近世の染付が墳丘上から出土しているほか(第21図98)、北側の近世・近代墓方面では硯の破片が出土している(第21図99)。このほか、近代以前の土錘が出土している(第21図100、101)。



第19図 蛸壺転用の蔵骨器の出土状態



第20図 蛸壺転用の蔵骨器



第21図 その他の遺物

表1 石棺材一覧表

種別番号	注記番号	器種	石材	長さ	高さ	厚さ	重量	備考
1	No.4	石棺材	緑泥片岩	1.143	0.353	0.049	31.2	東壁北 ほぞ穴有
2	No.2+No.11	石棺材	緑泥片岩	0.308	0.419	0.045	8.5	北壁 (小口)
3	No.9	石棺材	緑泥片岩	0.288	0.406	0.039	9	南壁 (小口)
4	No.1	石棺材	緑泥片岩	0.903	0.35	0.043	31.2	西壁北 ほぞ穴有
5	No.10	石棺材	緑泥片岩	0.608	0.312	0.04	15	西壁南 ほぞ穴有
6	No.7+No.8	石棺材	緑泥片岩	0.44	0.318	0.028	8.5	東壁南 ほぞ穴有
7	No.14	石棺材	緑泥片岩	0.587	0.399	0.067	23	蓋 内面縁部に段有

表2 勾玉・管玉一覧表

種別番号	注記番号	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	孔径cm	重量g
8	勾玉No.1	勾玉	瑪瑙	2.5	1.4	0.6	0.15-0.2	3.1
9	勾玉No.2	勾玉	瑪瑙	3.9	1.7	0.75	0.3-0.15	4.7
10	勾玉No.3	勾玉	瑪瑙	2.8	1.8	0.9	0.2-0.3	5.5
11	勾玉No.4	勾玉	瑪瑙	2.8	1.8	0.9	0.25-0.1	5.5
12	管玉No.7	管玉	碧玉カ	2	0.35		0.2	0.2
13	管玉No.3	管玉	碧玉カ	1.8	0.35		0.15	0.2
14	管玉No.6	管玉	碧玉カ	1.7	0.35		0.15	0.1
15	管玉No.5	管玉	碧玉カ					
16	管玉No.4	管玉	碧玉カ	0.65	0.35		0.15	—
17	管玉No.2	管玉	碧玉カ	0.5	0.35		0.15	—

表3 土器一覧表

種別番号	注記番号	場所	器種	外面	内面	成形	器高/口径cm
18		塚土表採	二重口縁壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
19		墳丘上表採	壺	ナデ,ヨコナデ	ナデ	積み上げ	
20		表採	壺底部	タテハケ後,ヘウナデ	ヨコヘウ前りとナデ	積み上げ	
21		表採	台付鉢	タテハケとヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
22		表採	瓶 <small>（須臾器）</small>	ナデ	ロクロナデ	ロクロ	
23		C3墳丘表土	蓋 <small>（）</small>	ヨコナデ	ヨコナデ		
24		C3表土	蓋か壺	ヨコナデ後タテハケ	ヨコナデ	積み上げ	
25		C3,トレ2	壺-鉢	ヨコナデ	ヨコナデ後斜めハケ	積み上げ	
26		C3,トレ1	蓋か壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	

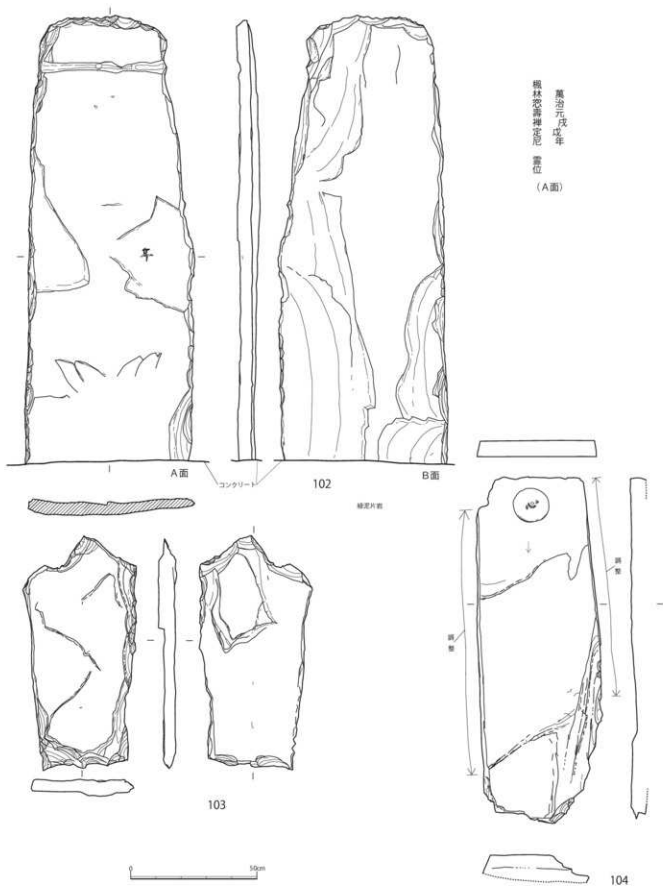
種図番号	注記番号	場所	器種	外面	内面	成形	器高/口径cm
27		墳頂北側裾張部		ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
28		主体部踵床		ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
29		S002.No.6	壺	タテハケ	頸部ヨコナデ指圧	積み上げ	
30	No.15	S002.No.15	壺	ヨコナデマハケ	工具ナデ	積み上げ	
31	No.9・19	S002.No.9・19	壺	ハケ	ヘラケズリ	積み上げ	
32	No.1	B3	高坏	ケズリ	ナデ	手ずくぬ	
33	トレ1.No.1	トレ1	薬(土師器)	タテハケ	ヘラ削り	積み上げ	
34	No.13	S002.No.13	台付鉢	タテハケ	ヨコナデ、工具ナデ	積み上げ	
35	No.1	D3	壺(土師器)	ナデ	摩滅	積み上げ	
36		D3、トレ1西	二重口緑壺	ナデ	ナデ	積み上げ	
37		D3、トレ1西	二重口緑壺	タテハケヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
38		D3、トレ1西	二重口緑壺	ヨコナデ	ナデ	積み上げ	
39		D3、トレ1西	二重口緑壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
40		D3、トレ1西	二重口緑壺	ヨコナデ	ナデ	積み上げ	
41		D3、トレ1西	二重口緑壺	ヨコナデ	ナデ	積み上げ	
42		D3、トレ1西	壺(土師器)	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
43		D3、トレ1西	壺(土師器)	ヨコナデ	指圧ヨコナデ	積み上げ	
44		D3、トレ1西	壺底部	ナデ	ナデ	積み上げ	
45	No.15	C3.No.15	二重口緑壺	ヨコナデ、波状文	ナデ	積み上げ	
46	No.14	C3.D4.No.14付近	ヨコナデ	ヨコナデ	摩滅で不明	積み上げ	
47	No.14	C3.No.14付近	高坏*	摩滅で不明	摩滅で不明	積み上げ	
48	No.14	C3.No.14付近	鉢-器台	摩滅で不明	摩滅で不明	積み上げ	
49	No.14	C3.No.14	小型丸底鉢	指ナデ	指ナデ	手ずくぬ	5.9/10.8
50	No.19・20・25	C3	小型丸底鉢	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	積み上げ	5.8/13.8
51		D4表土	二重口緑壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	/20.8
52		D4表土	二重口緑壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
53		D4表土	二重口緑壺	ヨコナデ	ヨコナデ	積み上げ	
54	No.1	S1.No.1	瓦質壺	ナデ	ナデ	積み上げ	103.6/84.0

表4 一字一石経観察表

種図番号	文字	長cm	幅cm	厚cm	重量g	種図番号	文字	石材	長cm	幅cm	厚cm	重量g
55	登	泥岩	2.95	2.15	0.45	5	75	逸	4.6	3.2	0.7	18.5
56	為		4.2	2.3	0.6	10.4	76	間	3.4	5	0.6	21.3
57	説		4.3	2.6	0.5	8.3	77	從	4.4	3.4	0.9	14.7
58	力		3.9	2.6	0.5	8.6	78	有	4.9	3.5	0.6	20
59	殊		3.4	2	0.6	6.7	79	穗	3.5	3.9	0.8	18.7
60	先		3.6	3.2	0.9	16.1	80		7.1	4.1	1	43.4
61	侍		4.4	2.4	0.7	12.1	81	片岩	5.6	4.2	0.75	29.9
62		緑泥片岩	4.3	2.05	0.75	9	82	與	6	4.45	0.75	32
63	羅		4.7	2.7	0.6	12.9	83	薨	5.8	3.3	0.7	21.7
64	宣	凝灰岩	3.9	3.1	1	12.5	84	佛	6.1	3	0.6	15.7
65	至下		4.15	3.65	0.6	8.9	85	佛	4.1	3.6	0.8	22.6
66	常	片岩	4.2	2.6	0.4	9.1	86	藏	4.95	3.5	0.7	15.2
67	衆	緑泥片岩	3.7	2.3	0.85	8.3	87	不	4.5	3.8	0.75	16
68	摩		3.5	2.8	0.6	10.8	88	通	4.45	3.45	0.35	11.9
69	二	緑泥片岩	4.1	3.4	0.7	15.6	89	興	3.5	3.1	0.7	12
70	家		4.3	2.55	0.8	7.5	90	輕	3.9	4	1.1	24.5
71	少	緑泥片岩	2.75	2.15	0.6	5.2	91	切	4.3	2.4	1.1	12.7
72	在	石英	3	2.4	7.5	9.2	92	？	2.7	2.4	5	4.2
73	燒		3.2	5.1	0.6	18	93	善	2.7	2.1	0.3	2.7
74	得		4.8	3.6	1.1	28.1						

表5 石棺材一覧表

種図番号	注記番号	器種	石材・材質	長さcm	高さcm	厚さcm	重量g	備考
94	C2.No.1	容器(壺蓋)		30.50				
95	墳頂北側裾張部	刺片	推定壺島産黒曜石	2.05	2.65	1.00	3.60	
96	C3採表層	刺片	推定壺島産黒曜石	1.60	3.15	0.35	11.00	
97	S2.No.8	刺片	推定壺島産黒曜石	5.50	3.75	1.30	23.20	
98	B3墳丘表土	染付皿						底部破片 トレ1の東
99	A3	礎			7.5(幅)		42.10	白色の石材
100	A3表土	土鏝		3.70	1.90		9.40	
101	A3表土	土鏝		4.00	1.70		6.40	
102		石棺材転用墓碑	緑泥片岩		175.00	5.50		現地実測 調査区外小野家墓地
103		石棺材	緑泥片岩	61.00		5.00		現地実測 庚申塚古墳
104		石棺材転用	緑泥片岩	91.00		7.00		現地実測 庚申塚古墳



第22図 周辺地域の石棺材

第Ⅳ章 まとめ

第1節 遺構 -古墳・第1主体、第2主体(石棺)-

小野古墳は、樺ノ木山地から海岸部に達するように延びる一支尾根上の鞍部に立地しており、南から北方向へ馬場古墳、馬場石棺、庚申塚古墳、小野古墳、小野家墓地石棺群とならぶ墳墓群の一つである。小野古墳の北側裾部に直線的な周溝があることから、墳形は方形墳と推測した。小野古墳の墳丘頂部と、北側周溝の落ち際までの高さは0.80m、北東隅部から西側推定墳端までの距離(一辺の墳丘規模)は10.70mで南北方向は11.3mの規模となる。小野古墳のトレンチ調査の結果、現状で地山削り出しの残存墳丘であり、当初の盛土部分は流出していると考えられる。埴輪類や葺石はなかった。

第1主体は、箱式石棺だった痕跡が残るものの、石棺材が抜き取られるなど、破壊が著しい。僅かに残った箱式石棺の残滓から、石材が緑泥片岩であることが分かった。かろうじて下底部で石英の小砂利からなる礫床が残存していた。この東より礫床面から玉類が出土した。

第2主体は、墳頂部から東側斜面にやや下った場所に位置しており、調査時には既に蓋が開けられていた。おそらく、第2主体は、墳丘構築時のものではなく、墳丘構築から時をおいた追葬的な施設であり、盛土・地山層の上から墓坑を掘りこんだのだろう。この点からも盛土層が流出していることがわかる。(綿貫)

第2節 出土遺物

小野古墳は墳丘が後世の削平などを受けているため、出土遺物すべてが元位置をとどめておらず、詳細な検討は困難である。小野古墳から南に離れた地点から出土した二重口緑壺や小型丸底鉢などは、丘陵全体が墓域として機能していたことを考えると古墳祭祀に使用されたと推測できるものの、出土状況から必ずしも小野古墳に帰属するとは言えない。そのため小野古墳に伴う遺物は、第1主体部から出土した勾玉・管玉と、墳丘から出土・採集された土器および周溝から出土した土器にしばって見ていきたい。副葬品である勾玉・管玉は、その形状からおおむね前期後半から中期にかけて位置付けられよう。また古墳祭祀に用いられたと考えられる土器は、壺や高坏などの器種が少量出土しているが、そのなかでも壺は特筆できる。二重口緑壺の口縁部は複数タイプが、底部は球形胴部に近いと考えられる形状で底部焼成前穿孔が確認できる。底部を開口して製作するのが顕著となる前期末から中期よりも、形状や技術的にも古い様相を示すことから、おおむね中期～後半あたりと考えられる。小野古墳では第1主体部への追葬の有無や古墳祭祀に用いられた土器がどの主体部に伴うものかなどを調査成果から検討できないため、ある程度の時間幅をもたせて前期後半段階(集成編年3～4期)と位置付けておきたい。

大分平野や海部地域において底部穿孔の壺形埴輪は蓬萊山古墳・野間1号墳など、前方後円墳や比較的規模の大きな古墳から出土している。小野古墳でも底部穿孔の壺が用いられているが、土器器を含めても少数古墳祭祀に用いられるというのが海部地域の小規模墳のあり方と見られる。今後、周辺の馬場古墳や上坊古墳などの大規模墳の様相解明が待たれる。そして小野古墳築造の背景には、近接する馬場古墳や猫塚古墳・築山古墳など海部地域を代表する有力墳を連綿と築くことができた地域的要因とともに、こうした被葬者との関連性が考えられる。(服部)



写真1 小野古墳の空中写真(1) 南西方向の景観 中央に小野古墳、左手尾根上に馬場古墳(前方後円墳)



写真2 小野古墳の空中写真(2) 北方向の景観 中央下に小野古墳

写真図版 2



写真 3 小野古墳の空中写真 (3) 東方向の景観 中央下木陰部分に小野古墳が位置 上方の山際に築山古墳が位置



写真 4 小野古墳の空中写真 (4) 西方向の近接写真 中央テントの左手の空地が小野古墳 左手の竹林に庚申塚古墳



写真5 小野古墳の近接写真 南方向 上方の竹林の中に庚申塚古墳が位置



写真6 小野古墳の第1主体部出土状況 南方向

写真図版 4



写真7 小野古墳の第1主体部 南方向



写真8 小野古墳の第1主体部墓壇断面 西方向



写真9 勾玉の出土状態



写真10 管玉の出土状態



写真11 第1主体部 礫床の石英礫



写真12 第1主体部 裏込め内緑泥片岩破砕礫



写真13 第2主体部 清掃後の掘削直前の状況

写真図版 6



写真14 第2主体部 石棺の完掘状況



写真15 第1主体部出土の勾玉 (8、9、10、11)

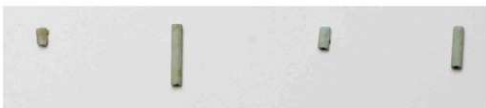


写真16 第1主体部出土の管玉 (17、13、16、15)



写真17 第1主体部出土の管玉 (14、12)



写真18 底部穿孔壺 (20)



写真19 台付鉢 (34)



写真20 小型丸底鉢 (49)



写真21 小型丸底鉢 (50)



写真22 二重口縁壺 (51)



写真23 二重口縁壺 (52)



写真24 第2主体部 石棺材 (1, No.4) 左に柄溝が存在



写真25 第2主体部 石棺材 (2, No.2+No.11)



写真26 第2主体部 石棺材 (3, No.9)



写真27 第2主体部 石棺材 (1, No.1) 右に柄溝が存在

写真図版 8



写真28 第2主体部 石棺材 (5, No.1) 左に柄溝が存在



写真29 第2主体部 石棺材 (6) 右に柄溝が存在



写真30 第2主体部 石棺材 (7, No.14)



写真31 一字一石経塔跡 掘削直前の状況



写真33 一字一石経



写真32 一字一石経塔跡 埋納墓の出土状況



写真34 鋳造転用の蔵骨器 (94)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おのこふん		
書名	小野古墳		
巻次			
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書		
シリーズ番号	第13集		
編集者	綿貫俊一、服部真和		
編集発行機関	大分県立埋蔵文化財センター		
所在地	870-0152 大分市牧録町1-61 TEL:097-552-0077 FAX:097-552-0700		
発行年月日	令和2(2020)年3月31日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
小野古墳	大分市大字馬場字中原	201	375	33.240781	131.784541	平成30年 5月29日 ～同年7 月25日	1,600㎡	県道新設

※2018年版大分県遺跡地図では、遺跡コード375は「庚申塚古墳」で、遺跡コード376は「小野古墳」となっている。しかし、旧所有者名、旧遺跡分布図を検討した結果、遺跡コード375が「小野古墳」で、遺跡コード376は「庚申塚古墳」が正しいことが判明した。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小野古墳	古墳、近世遺構	古墳時代	礎床、石棺、墳丘	勾玉、管珠、石棺材	方形墳
		江戸時代	一字一石経塔跡	一字一石経	

小野古墳

－大分港坂ノ市地区統合補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集

2020年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61
TEL 097-552-0077

印 刷 株式会社得丸デザイン印刷
〒870-0122 大分県大分市大字丸亀258番地
TEL 097-521-0700

